

特集

医療に求められるイノベーション

しばらく前から、日本社会の現状や将来についてのマイナスな話題や報道等が基調となり、閉塞感といった言葉がよく使われるようになってからも久しくなっている。振り返れば戦後の日本は“焼け跡”から出発した後、ひたすら経済成長あるいはパイの拡大ということを目標にひた走ってきたが、物質的な需要が飽和しつつある中である種の大きな曲がり角に来ていることは確かである。加えて高度成長期には一定の好循環をもたらした社会システムが、少なからず“固まり”，機能不全を見せていることも事実である。

こうした状況に対し、「新たな経済成長」や“底上げ戦略”を唱える声もあり、それ自体は重要なことと思われるが、同時にこれからの日本社会の新たな展望が、従来の成長路線の単純な延長にはないこともまた銘記しなければならない。

本特集の中心テーマである「イノベーション」は、言うまでもなく20世紀の経済学者の巨人の1人であるシュンペーターによって広く浸透するようになった言葉である。彼は経済発展の起動力は企業家による「新結合」にあるととらえ、そうした新結合は財や生産要素等の新たな組み合わせによって生じると考えた。これが「イノベーション(革新)」の意味であり、どちらかという日本ではこの言葉は“技術革新(モノの革新)”といった狭い意味に解される傾向があるが、それは組織やサービス、制度など、本来もっと広い内容を意味するものである。

幸い、近年では日本でも「社会起業家」「ソーシャル・イノベーション」といった言葉が次第に広く使われるようになり、例えば昨年7月のニューズウィーク誌「世界を変える社会企業家100人」に何人かの日本人が選ばれたりするようになっている。思えば医療という領域は、他でもなくこうした(本来の)意味でのイノベーションにもっともふさわしい分野といえるのではなかろうか。

本特集は、以上のような関心を踏まえたものであり、サービス、制度、健康、社会的起業等といった新たな観点から医療における様々なイノベーションの可能性を探るものである。こうした試みや実践が、医療分野や日本社会に新たな風を起こし、それらを通じて互いに「元気」をもらう人々が少しでも増えていけば、様々な展望が広がっていくのではないだろうか。

広井 良典

千葉大学法経学部教授